

# 落語鑑賞のしおり

## 1. 落語の歴史

落語は明治の初めまで「落とし噺」といわれていました。その「落とし噺」をいつ誰が始めたかについては、鎌倉時代の宇治大納言とか豊臣秀吉の相手をした曾呂利新左衛門とかいわれておりますがはっきりしません。

元和9年（1623年）僧侶の安楽庵策伝が、布教のため行ってきた説

教の中から笑が多いものやサゲを使用した落とし噺の類を「醒睡笑」という書物にまとめました。これは千話以上からなる膨大な笑話集で「子ほめ」の原型なども収められており、落語の起源とされております。

17世紀末から18世紀にかけて、江戸の鹿野武左衛門、京都の露の五郎兵衛、大坂（当時はこう表記）の米沢彦八などが街頭で辻話を行っております。これが大衆の前で落とし噺を聞かせた最初といわれています。

その後、弾圧などもあり一時落語は下火になりますが、安永・天明（1770～90年）頃江戸に立川焉馬が現れ、同好会のような「咄の会」を催し息を吹き返します。寛政10（1798）年、初代三笑亭可楽が一定の場所で木戸銭をとる興行を初めて行いました。これが寄席の嚆矢といわれています。

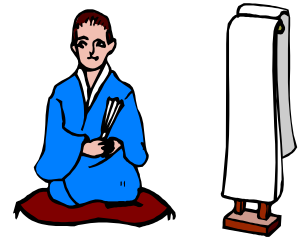
寄席ができると落語家や噺も増えて、文化・文政（1804～1830）年間には寄席の数が120軒を超えたといわれております。「三遊亭」「古今亭」などの亭号もこの時期に作られたようです。

幕末には落語中興の祖といわれる三遊亭圓朝が登場します。「牡丹燈籠」「芝浜」「死神」といった現代に残る名作を次々に発表して好評を博しました。明治新政府は芸能も統制化におくという方針で落語も影響を受けますが、この頃はまた、初代三遊亭圓左、四代目橘家圓喬、初代三遊亭圓右、三代目柳家小さん、四代目橘家圓蔵らを中心として「落語研究会」が創られ落語の質が高められた時期でもありました。主にこの時期に作られた落語が今「古典落語」と呼ばれているものです。

明治・大正年間には落語家の団体は離合集散を繰り返しながらも隆盛を極めた時代でしたが、太平洋戦争に突入する頃から政府の大きな統制を受け、戦争中はまさに落語どころではありませんでした。

終戦後は、民衆が笑いに飢えていたことに加え、それまで寄席のある地域でしか楽しむことのできなかつた落語がラジオやテレビを通じて全国各地で見聞きできるようになったため落語の大ブームが起こります。昭和30年代には、三代目三遊亭金馬、五代目古今亭志ん生、八代目桂文楽といったスーパースターが出現して、落語は国民的娯楽として国民に浸透していきました。

現在では、定席の数は減りましたが落語家の数は東京だけで400人を超えており、江戸、明治を凌ぐ数字となっています。



## 2. 落語の分類

### （1）形式による分類

#### 東京落語と上方落語

東京と上方落語の違いは、大雑把にいうと効果音と小道具にあります。すなわち、上方落語は見台（小さな机）、小拍子（小さな拍子木）、膝隠し（低い衝立）が用意され、噺の途中に「はめもの」という囃子の効果音が入ります。これに対し、東京は高座に座布団と湯飲みが置いてあるだけです。

#### 古典落語と新作落語

古典落語は主として明治以前に作られ、人口に膾炙しているもので、多くの落語家によっ

て語り継がれているものです。一方、新作落語はその時々時代の時代背景を織り込んで作られた落語で原則としてその人一人により演じられるものです。

## (2) 内容による分類

- 滑稽噺 随所で笑いをとる、面白可笑しい噺。「牛ほめ」「饅頭こわい」「替り目」など
- 人情噺 笑わせるよりむしろ登場人物の内側をリアルに描き聞き手の涙を誘う噺。「芝浜」「文七元結」「子別れ」など
- 怪談噺 幽霊・お化けなどを扱った噺。主に夏に高座にかけられる。「真景累ヶ淵」「牡丹燈籠」など
- 廓 噺 (上方では「茶屋噺」) 遊郭で繰り広げられる悲喜劇を扱った噺。「明烏」「居残り佐平次」など
- 長屋噺 長屋の生活ぶりを描いた噺で、長屋の人間を描いたもの(「長屋の花見」「大山詣り」など)と長屋の建物を描いたもの(「お化け長屋」「小言幸兵衛」など)の2類ある。
- 仕方噺 演者の仕草や動きが鍵となる噺。
- 前座噺 初心者でも取り組めるように構成された噺。「寿限無」「道具屋」など
- お店噺 町人の子がお店に奉公しているときに起きるできごとを描いた噺。「崇徳院」「怪気の独楽」など
- 与太郎噺 一寸変わったまたは間抜けな男が舞台回しをする噺。「道具屋」「ろくろ首」など
- 子供噺 文字通り子供は主人公の噺。これには、親孝行で純真な子供の噺(「やぶ入り」「子別れ」など)と大人をやり込めるこまっしゃくれた子供の噺(「初天神」「雛鰯」など)の2種類ある。
- 大名・武家噺 庶民が大名・武家をからかいやっつける噺。「たがや」「首提灯」など
- 旅 噺 旅の悲喜こもごもを描いた噺。「大山詣り」「宿屋のあだ討ち」など
- 酒 噺 飲む行為、酔った状態およびそれから派生する問題等を描いた噺。「居酒屋」「らくだ」など

## 3. 落語のおち(さげ)の種類

- |        |                      |               |
|--------|----------------------|---------------|
| 逆さおち   | 物事の立場が入れ替わるおち        | 「桃太郎」など       |
| 仕草おち   | 言葉でなく仕草(動作)でおとすもの    | 「狸さい」「蒟蒻問答」など |
| 考えおち   | 一瞬考えてから、にやりとさせるおち    |               |
| 地口おち   | ダジャレ、語呂合わせなどでおとすもの   | 「三方一両損」など     |
| 仕込みおち  | 前もって仕込んだ伏線がおちになるもの   | 「山崎屋」など       |
| 途端おち   | 最後の一言で結末をつけるもの       | 「百年目」など       |
| とんとんおち | 梯子のように上げてからおとすもの     | 「一目上がり」など     |
| ぶっつけおち | 相手の言う意味の取り違いがおちになるもの | 「百川」など        |
| 間抜けおち  | 間抜けな馬鹿馬鹿しい言葉でおとすもの   | 「粗忽長屋」など      |
| 回りおち   | 回り回って元に戻るおち          | 「回り猫」など       |
| 見立ておち  | 意表をつく物にみだてておとすもの     | 「首提灯」など       |

## 4. 落語に使用される用語

- 色物 寄席における落語や講談以外の出し物。名前が朱色の字で書かれたことに由来する。
- オチ 噺の最後に言う締めの一語。サゲともいう。
- 開口一番 最初の出し物。寄席では前座の高座が多い。

か ぜ 扇子のこと。

上手、下手 客席から見て右手が上手、左手が下手。登場人物が二人居る場合、目上の者が上手、目下の者が下手になるように演じ分ける。

高座返し 演者交代のとき、高座の座布団を裏返しにすること。

香 盤 落語家の序列。入門や真打ち昇進の順になっている。

定 席 年間を通じて演芸の興行が見られる寄席。落語の場合は落語定席という。

真打ち 前座・二つ目を経て実力を認められて昇進する落語家の身分のひとつ。～師匠と呼ばれる。寄席の主任を勤めることができ、弟子をとることも許される。関東のみで上方にはこの制度はない。

席 亭 寄席の経営者。興行の顔ぶれを決めるなど、芸人への影響力はとても大きい。

前 座 落語家の身分のひとつ。芸名を与えられ高座に上がる一方、師匠の身の回りの世話や寄席の太鼓、高座返しなども行う。

前座見習 名を与えられない付き人のこと。

亭 号 幕末頃できた落語家の名跡の種類のひとつ。三遊亭、春風亭、古今亭などがある。

出囃子 噺家が高座にあがるときのテーマソング。出囃子に合わせて登場し、座布団に座ってゆっくりと顔を上げて正面を向くと同時に出囃子が終了する。次は出囃子の例。

桂 米 丸	金比羅舟々	桂 歌 丸	大漁節
三遊亭円楽	元禄花見踊	柳家小三治	二上りかっこ
立川談志	木賊刈り	立川志の輔	梅は咲いたか
橋家円蔵	虎退治	春風亭小朝	さわぎ
三遊亭小遊三	ボタンとリボン		

ト リ 寄席や落語会で、興行の最後に高座に上がる噺家。主任。

ハ ナ 寄席や落語会で最初に高座に上がる噺家。

二つ目 落語家の上から二番目の身分。晴れて一人前の落語家として認められる。師匠の身の回りの世話から開放されて、羽織を着ることが許される。

まくら 落語の本筋の前に話す小噺やフリートーク。

まねき 寄席の入口付近に置いてある、当日の出演者などを書いた看板。

マンガラ てぬぐいのこと。

めくり 寄席で高座の脇に置かれる、口演中の落語家の名前を書いた紙。

寄 席 年間を通じて落語や講談が見られる小屋。現在は落語協会が、末広亭、池袋演芸場、鈴木演芸場、浅草演芸ホール、黒門亭（落語協会2階）、落語芸術協会が末広亭、浅草演芸ホール、池袋演芸場、お江戸日本橋亭、お江戸広小路亭、横浜にぎわい座を定席としている。

割 り 寄席で、客の入りに応じて分配、支給される歩合給のこと。

## 5. 落語家団体の系譜

明治8年、三代目麗々亭柳橋を頭取に「落語陸連」を結成するが、明治20年代になると「柳派」「三遊派」の2大派閥に分かれ、各寄席を半月づつ交代で興行するようになる。

大正6年8月「柳派」と「三遊派」が合併し「東京寄席演芸株式会社」を創設して、月給制を取り入れる。ところが、同会社に所属していた五代目柳亭左楽が脱退し、四代目春風亭柳枝と「落語睦会」（三遊柳連睦会）を旗揚げする。その後も6年ほど脱退、復帰、旗揚げ、合併、解散、などが繰り返される。

大正12年10月関東大震災の後に、五代目柳亭左楽が奔走した結果、大同団結して「東京落語協会」を設立する。これが現在の「社団法人落語協会」のルーツである。しかし、翌13年6月には旧睦会が独立し、「東京落語睦会」として復活する。その後も両会派は分裂、解散、設立を繰り返し「落語演芸東西会」「柳三遊研成会」「日本演芸協会」「三語楼協会」「金語楼一座」「東京落語組合」などの団体が生まれたり、消えたりした。

昭和5年六代目春風亭柳橋と柳家金語楼が「日本芸術協会」を創設する。これが現在の「社団法人落語芸術協会」の母体である。

昭和15年5月第2次世界大戦突入を前にして、新興行取締り規則の改正により、演芸界は警視庁統括の下で「講談落語協会」として統一させられ、全ての落語家は否応なくこの協会に所属することになる。

昭和20年終戦後、官主導の「講談落語協会」は解散し、元の「東京落語協会」と「落語芸術協会」に戻る。「東京落語協会」は昭和21年10月四代目柳家小さんが会長に就任して「落語協会」として新発足する。昭和52年「落語協会」「落語芸術協会」は文化庁の認可を受けて「社団法人」となる。

昭和53年5月六代目三遊亭圓生が中心となり、七代目橋家円蔵、三代目古今亭志ん朝、五代目月の家圓鏡らが落語協会から脱退して「三遊協会」を創設するが、直後に圓生直系一門以外の円蔵、志ん朝らは全員落語協会に復帰する。昭和54年圓生没後、圓窓、圓也、圓丈らが落語協会に復帰したため、「三遊協会」は円楽一門のみとなり、「大日本すみれ会」から「円楽党」と名称を変更して現在にいたっている。

昭和57年立川談志が弟子を引き連れて落語協会を脱退して「立川流」を創設する。

上方落語では、昭和32年三代目林家染丸を中心に18名をもって「上方落語協会」を結成し、平成16年文化庁の認可を受けて社団法人となり今日にいたっている。

このように落語家の団体は離散集合を繰り返し、現在では東京の「落語協会」「落語芸術協会」「円楽党」「立川流」、関西の「上方落語協会」という構成になっている。

各団体の主な所属落語家は次表のとおり。

落語協会	落語芸術協会	円楽党	上方落語協会
代表者 鈴々舎馬風	代表者 桂歌丸	代表者 三遊亭円楽	代表者 桂三枝
主な所属落語家 三遊亭圓歌 三遊亭金馬 柳家小せん 柳家さん助 橋家圓蔵 古今亭圓菊 柳家小三治 三遊亭圓窓 入船亭扇橋 林家こん平 林家木久蔵	主な所属落語家 桂米丸 三遊亭円右 三遊亭円馬 三遊亭小遊三 春風亭柳橋 春風亭柳昇 昔昔亭桃太郎 春風亭昇太 春風亭柳好 桂文治 三笑亭夢楽	主な所属落語家 三遊亭鳳楽 三遊亭好楽 三遊亭楽太郎 立川流 代表者 立川談志 主な所属落語家 立川左談次 立川談の助 立川ぜん馬 立川志の輔	主な所属落語家 桂福団治 桂春駒 月亭可朝 桂ざこば 桂米輔 桂さん枝 桂文珍 笑福亭仁鶴 笑福亭鶴光 笑福亭鶴瓶 林家染丸